

令和 2 年 5 月 4 日現在

機関番号：30104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K06720

研究課題名(和文) 北海道における日本版CCRCの成果評価 - 東京圏高齢者の移住構想の事例分析

研究課題名(英文) Evaluation of the Japanese version of Continuing Care Retirement Communities in Hokkaido - An Analysis of a Relocation Scheme for Elderly People from the Tokyo Area

研究代表者

大橋 美幸 (OHASHI, MIYUKI)

函館大学・商学部・准教授

研究者番号：10337199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：各地の日本版CCRC構想から、日本版CCRCは地方創生の仕掛けとして地域の総合的な問題解決が目指されていた。高齢者人口移動の分析から、北海道では後期高齢者等の暮らしを支える取り組みが求められた(研究課題1：北海道の日本版CCRCの位置づけ)。また、新規開発を伴う北海道の日本版CCRC 2カ所の事例分析を行った(研究課題2：事例分析)。東京圏から北海道への高齢期移住者インタビュー等では、北海道に特徴的な気候、自然、風土や習慣、スローライフが移住につながっていた。利便性が良くない中で自治体の移住支援制度が移住の後押しをしていた(研究課題3：高齢期の北海道移住の意味)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の実施時期は、各地の日本版CCRCのはじまりにあたり、先駆的な取り組みの事例分析と進捗状況の評価を行った。日本版CCRCの今後の展開や可能性を含めた考察を行うことができた。

研究成果の概要(英文)：The Japanese version of CCRC in Hokkaido was evaluated. The Japanese version of CCRC from various regions showed that it has been incorporated into a larger regional revitalization scheme for the purpose of solving the more general issues. An analysis of relocation of elderly population suggested the need of supportive measures for the daily lives of latter-stage elderly people in Hokkaido (Research topic 1: The Positioning of the Japanese CCRC in Hokkaido). Furthermore, we conducted two case studies Japanese version CCRC in Hokkaido with new developments (Research topic 2: Case Study). It is learned from interviews with elderly people who have moved to Hokkaido from the Tokyo area that climate, nature, customs, and the slow life pace in Hokkaido are all factors leading to their relocation. Despite the lack of convenience, local governments have managed to encourage the relocation support systems (Research topic 3: The Meaning of Relocation to Hokkaido for the Elderly).

研究分野：社会福祉

キーワード：生涯活躍のまち 日本版CCRC 移住 高齢者 北海道

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

地方創生の一環として日本版 CCRC が進められており、多くの自治体が構想を作成している。日本版 CCRC はアメリカの退職者コミュニティ (CCRC) を参考にしており、東京圏の高齢者の地方移住と、地方の高齢者の「まちなか居住」をすすめるものである。通称「生涯活躍のまち」と呼ばれ、高齢者がおおそ健康な間に移り住み、地域と関わりながら、必要に応じたサービスを利用して生き生きと暮らし続けることが目指されている。

本研究の実施時期は、各地の日本版 CCRC のはじまりにあたり、先駆的な取り組みの事例分析と、進捗状況の評価になる。今後の展開や可能性を含めて考察する。

2. 研究の目的

研究課題は次の 3 点である。

研究課題(1)

北海道における日本版 CCRC 及び高齢期移住について、他地域との比較を行い特徴をまとめる。

研究課題(2)

北海道の中核都市及び周辺市町村で、過疎地に新規開発を伴う日本版 CCRC を取り上げて事例分析を行う。

研究課題(3)

東京圏高齢者の北海道移住者及び移住希望者の意識分析を行う。高齢期における東京圏からの北海道移住の意味をまとめる。

3. 研究の方法

3 つの研究課題に対応した研究方法は次のとおりである。

研究課題(1)

2 つの調査を行った。北海道内外の日本版 CCRC の資料収集、現地調査、インタビューを行った。5 つの先駆的な日本版 CCRC 構想から日本版 CCRC の展開をまとめた。

加えて 人口移動調査 (国立社会保障・人口問題研究所 2017)、住民基本台帳人口移動報告 (総務省 2018)、国勢調査 (総務省 2017) から東京圏高齢者の人口移動の分析を行い、北海道の特徴をまとめた。

研究課題(2)

北海道の過疎地に新規開発を伴う日本版 CCRC の取り組みの進捗状況の経過を追った。調査対象は 中核都市 1 カ所 (函館福祉コミュニティエリア)、周辺自治体 1 カ所 (生涯活躍のまち厚沢部) である。

研究課題(3)

2 つの調査を行った。北海道函館市の高齢期移住者 9 組 10 人にインタビューを行い、高齢期に北海道各地に移住した人のインタビュー記事を収集した。インタビュー等から移住に関する言葉を拾い出し、類似するものをコードとし、コード間の関係からコードをまとめてサブカテゴリー、サブカテゴリー間の関係からまとめてカテゴリーとした。

加えて、「地方移住に関するアンケート調査 2013 (三菱総合研究所)」の二次分析を行った。東京圏在住の 50 歳以上の人に限り、移住希望先別に移住の理由、移住後のライフスタイル、情報収集先等の比較を行った。

東京圏高齢者にとっての北海道移住の意味をまとめた。

4. 研究成果

研究結果は次のとおりである。

研究課題(1)

日本版 CCRC 構想は、地方創生の仕掛けとして活用されており、地域のかかえる課題の総合的な解決が目指されていた。例えば、北海道厚沢部町では町立病院改革と共生社会づくり、新潟県南魚沼市では国際大学と連携した高齢者の生きがいづくり、海外 IT 企業の誘致等が進められていた。石川県輪島市には JOCA (青年海外協力協会) から青年海外協力隊 OB が移住し、長野県佐久市ではクラウドファンディング等を利用した「まちづくり会社」の立ち上げが検討されている。鳥取県南部町では空き家を借上げて町負担で改修して貸し出す、新たな「空き家バンク」が行われており、加えて JASCA (全国学生連携機構) のフィールドワークが取り組みにつ

ながっている。このようなまちづくり会社、青年海外協力隊 OB や学生のフィールドワークとの連携、空き家の借上げ及び改修等の新たな手法も生まれており、展開が期待される。

日本版 CCRC で期待されている東京圏高齢者の移住について現状を見ると、前期高齢者(65~74歳)で東京圏から地方への人口移動が見られるものの、後期高齢者(75~84歳)・超高齢者(85歳以上)で、逆に地方から東京圏への移動が見られる。移住理由を見ると前期高齢者は「定年退職」、「親と同居」等であり、後期高齢者・超高齢者は「子と同居」、「家族の移動に伴って」等である。合わせて見ると、前期高齢者が定年退職後に老親のために東京圏から地方へ帰ってきて、後期高齢者・超高齢者は子どもがいる東京圏へ引き取られていっており、地方が高齢者を支え切れていないことがわかる。特に北海道は前期高齢者で東京都から多くの移住者があり5年間で約2000人にのぼるが、後期高齢者・超高齢者で逆に東京都に戻っており5年間で1000人になる。つまり東京都との間で移住に関連して増えた高齢者人口が半減している。高齢者を支える観点からの取り組みが求められる。

研究課題(2)

函館市(人口約26万人、高齢化率34%)の日本版 CCRC「函館福祉コミュニティエリア」は医療法人を中心とした12法人が運営事業者となり、2016年度に地域再生計画(生涯活躍のまち形成事業)の認定を受けた。市営住宅跡地6haに新規開発するもので、JR函館駅から約6km、一日約250便の路線バスが運行されている。近隣に保育園、小中学校ある。コンビニ、1km先にスーパーがあり、敷地内に診療所、郵便局、ドラッグストア、スーパーを誘致する。2017年度に特別養護老人ホーム100床、地域密着型特別養護老人ホーム29床、認知症グループホーム4ユニット36床、有料老人ホーム(特定施設)2施設が整備され、2018年度に入居がはじまった。福祉施設群周囲に住宅宅地約100区画がつくられ2017年度に分譲が開始された。

経済波及効果は2016年度16.43億円、2017年度57.94億円。施設運営に関する雇用人数は2016年度8人、2017年度135人。市外からの居住者は2017年度12人であり、北海道からの30~40代が多く、東京圏高齢者はいない。東京での移住セミナーの参加者は10数人であり、移住にはつながっていない。

地域交流拠点において運動教室等が行われており、地元のボランティアが本を持ち寄って図書室をつくったり、無料でコーヒーを出してカフェをしたりしはじめている。

厚沢部町(人口約4000人、高齢化率39%)の日本版 CCRC「生涯活躍のまち厚沢部」は子どもから高齢者まで、ケア、住まい、学校、就労にいたる5つの総合的なプロジェクトである。町立病院の社会的入院の解消に向けて、2013年に町役場横の町有地を利用して有料老人ホーム、デイサービス、グループホームがつくられた。2017年に学校や高齢者世帯へ食を提供する給食センターができ、2019年に人口減少のなか3つの保育所を統合して認定こども園ができる予定である。住まいは高齢者を対象としていたが、入居希望者が少なく、子育て世帯を含めたかたちに見直された。また、高校を卒業すると他市町村へ流出してしまう若年層について卒業後の地元就職につながる学ぶ場として介護専門学校が検討されていたが、開校しても学生が集まらないことが考えられ見送られた。

移住を主に担当しているのは「まちづくり会社」であり、移住の相談、広報、支援等とともに、シティプロモーション、観光等を行っている。2009年に町の100%出資でつくられたものである。

、ともに日本版 CCRC 計画の途上であり、今後も継続的に経過を追いたい。

研究課題(3)

北海道へ的高齢期移住者のインタビュー等から、5カテゴリー、16サブカテゴリー、46コードが抽出された。カテゴリーを[]、サブカテゴリーを 、コードを《 》、インタビューでの言葉を「 」として示す。

移住先として北海道を選択した理由の一つはUターンであり、《出身地である》ために退職後に戻ってきている。また、介護等で《親類が近くにいる》ところに移ってきたり、子ども等が老後の生活の安心をもたらすものとして考えられている。北海道の一つは 知った土地・知り合いがいる ために、移住先として選択されている。

また、北海道は《風景や自然に親しみ》を感じたり、《自然体験や散策を楽しむ》ために、移住先として選択されている。「雄大な景色」、「豊かな自然」等の言葉があり、鮭の遡上やオオワシ等の観察が紹介されている。加えて、東日本大震災等を踏まえて《災害が少ない》ことが考慮されている。北海道に特徴的な風景や自然 が移住先の選択につながっているのである。

そして、北海道の《夏の涼しさ》が評価されている。冬は《除雪はそれほどでもない》、《冬も家の中は暖かい》という声もあるが、《除雪は大変》、《冬の生活になれない》という人もある。杉が少ないことから、花粉症等についての話もあり、《花粉症等が軽くなった》という人もいれば、《花粉症等は治らなかった》という人もいる。また、北海道は梅雨がないと言われているが《梅雨はあった》という声もある。北海道に特徴的な気温・気候 が移住先の選択につながっている。

以上の 知った土地・知り合いがいる 、北海道に特徴的な風景や自然 、北海道に特徴的な気温・気候 は北海道にしかないものであり、[北海道に特徴的な気候、自然、風土や習慣]を評価したものである。

また、北海道は《食や水がおいしい》と話されており、移住者は 食を楽しむ 生活を送っている。また、《家庭菜園や農業がしたい》という声があり、「ガーデニングや野菜づくり」、「無農薬野菜を自給自足」等が楽しんでいる。他方で、家庭農園や農業については《堆肥の匂いに悩む》人もいる。北海道は 食を楽しむ、家庭農園や農業を楽しむ 生活をおくりやすいところとして選択されているのである。

他に、絵画等の《芸術》、薪小屋の自作等の《日曜大工》、ジョギング等の《運動》、お花等の《習い事》で 趣味を満喫 されている。ただし、《イベントが少なく》、遊ぶ場所がない という人もいる。

町については、「大きすぎない街」であると考えられており、《都市規模が適正》だと評価されている。また「人混みから離れて暮らしたい」人にとって《閑静》な暮らしができるところであり、静かに暮らす ことが選択されている。

加えて、《子どもが多く、にぎやか》なところもあり、子どもと暮らす ことも可能である。以上の 食を楽しむ、家庭菜園や農業を楽しむ、趣味を満喫 しながら、イベントは少ない が 静かに暮らす、希望する人は 子どもと暮らす 生活は[スローライフ]のイメージであり、北海道に特徴的なライフスタイルとして移住先の選択につながっている。

他方で、北海道は《交通の利便性が良い》ところもあれば、《交通の利便性等が悪い》ところもある。また、《医療機関の利便性が良い》という声もあれば、逆に《医療機関の利便性が悪い》という意見もある。買物についても《買物の利便性が良い》という人もいれば、逆に《買物の利便性が悪い》という人もいる。公共施設でも《公共施設の利便性が良い》、《公共施設の利便性が悪い》と両面の評価がされている。利便性 については、地域等によって多様な話がされている。また、《家賃が安い》ことが評価されている。

移住後に《地域に溶け込む》ために「交流会」に出たり、「町内会」に入る等、地域活動に参加されている。逆に《近所付き合いはしていない》という人もいる。《まわりの人のやさしい》という話がされており、「とても親切」、「暖かい」と評価されている。「観光ボランティア」等の《ボランティアをしている》人もいる。いずれも移住後の 地域とのつながり に関することである。

また、移住後のハローワークでの就職活動等での《再就職》、ピザ屋等の《起業》について話されており、仕事 も重要な要素となっている。

移住後の 利便性、地域とのつながり、仕事 は[移住後の暮らしやすさ]に関わることであり、北海道に限らず、移住先を選択する際に考慮されるものであろう。

また、移住者から見た町の様子を発信するような《情報発信》が行われており、《地域おこし協力隊》への応募をきっかけに北海道に移住した人もいる。地域おこしに参加 するものであり、移住先を選択する際に[地域おこし]が考えられているのである。

移住にあたって、移住先を訪問したり、体験したり、家を探したりするが、《訪問時の相談》、《ちょっと暮らし体験・移住体験ツアー》という 移住先の体験の支援 や、家を建てる際の《建設会社の紹介》、《土地の無償譲渡》という 土地や家の取得の支援 が移住先を選択する際に手がかかりとなっている。[移住者支援がある]ことが、一つは北海道を移住先として選択させているのである。

また、東京圏高齢者の移住希望者調査の二次分析から、移住後に希望するライフスタイルは自然志向であり、利便性が良くない中で出身地への U ターンを含め、移住 HP がきっかけとなり、自治体の移住支援制度が後押しをして北海道への移住が選択されていた。

<引用文献>

国立社会保障・人口問題研究所、第8回人口移動調査、2017

総務省、2017年 住民基本台帳人口移動報告、2018

総務省、平成27年国勢調査、2017

三菱総合研究所、地方移住に関するアンケート調査、2013

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大橋美幸	4. 巻 50
2. 論文標題 高齢期における北海道移住の意味	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 函館大学論究	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18896/00000305	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋美幸	4. 巻 49
2. 論文標題 地方問題解決の仕掛けとしての生涯活躍のまちの活用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 函館大学論究	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18896/00000281	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋美幸	4. 巻 10
2. 論文標題 大都市高齢者の地方移住	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 64-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Miyuki OHASHI
2. 発表標題 Problems of post-retirement migration in Japan
3. 学会等名 21stAsia-Pacific Regional Conference of Alzheimer's Disease International（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

生涯活躍のまち（日本版CCRC）研究プロジェクト
<http://hakodate-ccrc.org/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 千歳 (Chitose Tanaka) (30346332)	国土館大学・理工学部・教授 (32616)	